

巻 頭 言

マツ枯れ防除に見る自然保護，環境保全の在り方

京都大学農学研究科微生物環境制御学分野

二 井 一 禎

学生の頃からマツ枯れ(マツ材線虫病)に関わってきたから、私のこの森林流行病との付き合いは40 数年になる。従って、マツ枯れの研究についてはお話しすることがたくさんあるが、今回はその話題を離れて、この研究を通じて感じ、考えた日本における自然保護，環境保護の在り方について私見を述べてみたい。もちろん、中身はマツ枯れを通してという、少し偏った見方にはなるが。

マツ枯れは長さが1 ミリほどの病原線虫を優れた飛翔力を持つカミキリムシが枯死木から健全木に運ぶために被害が広がる流行病である。流行病を防除する鉄則は鳥インフルエンザや豚コレラの例を持ち出すまでもなく、水際で徹底防除を実施することに尽きる。マツ枯れについて、この鉄則を当てはめると、およそこの考え方が遵守されていないことに気がつく。いずれの土地でこの病気が発生した場合にも、マツ林に数本の被害木が発生した段階では住民はもとより、マスコミも行政もほとんど気がつくことが無いし、たとえ気がついていても無視を決め込んでいることが多い。そして、被害が広がり、誰の目にもマツ林の惨状が明らかになってから、大変だ、大変だと騒ぎ出す。そうなるからでは病気はマツ林の広くに行き渡り、この病気の伝播・拡大の張本人、カミキリムシの林内密度も上がり、少々の防除手段では被害を食い止めることが難しくなる。仕方なく、カミキリムシを標的にした殺虫剤をヘリコプターやラジコンヘリなどで散布する方法が取られてきたが、環

境への影響や、人体への影響を懸念する人たちから反対の声が上がり、この大面積を対象とした防除法は不徹底なものになる。どこに、失敗の原因があったのか。言うまでもなく、初期対応のマズさである。いかに自然を愛し、環境の保護を唱える人でも、人と他の生物を同じ次元で捉えられる人は限られているだろう。しかし、マツもヒトも地球上で細菌から進化した生物の一種にすぎない。にも関わらず、「人の命は地球より重い」などと言う人も、「マツの命も地球より重い」とは考えないのであろう。広いマツ林にポツンと発生した枯れマツなど誰も気に留めないのだ。その結果、被害が広がり、防除に大きな予算を費やしても上手く防除ができなくなる。挙げ句の果ては、「人の健康に悪影響が出るくらいなら薬剤の散布などやめるべきだ」となる。ここまでは良い。しかし、返す刀で、「その結果マツ林が絶滅しても構わないではないか」といわれると、私はそのような考え方には与しないと言うしかない。このような意見の裏には、「所詮マツなど」という考え方が見え隠れする。ヒトと他の生物の間には生命の重さに決定的な違いがあると断定的に主張する人は、自国第一主義を唱える昨近の政治家や、人種差別をする人々とどこか考えに共通点がありはしないだろうか。断っておきたいが、人間とマツとどちらの命が大事なんだと問われれば、私だって人間を選ぶ。しかし、だからと言って、マツなんて枯れてしまっても問題が無いという意見には

絶対賛成できない。山腹に累々と放置されたマツの枯死木を見ると、どうしてマツ林がこのような惨状を呈するまで放置しておいたのだらうと腹立たしい思いに駆られる。

皆さんご存知ですか。つい50年ほど昔には、アカマツ林は我々の近くの里山にどこでも普通に見られたことを。また、海岸には白砂青松と言って、どこにもクロマツ林が広がっていたことを。それが、たった一つの流行病によって多くの地域で消滅してしまった。でも、その事実を逆手にとって、マツ林が無くなっても、何も生態系に、ましてや人間社会に悪影響は出てないではないか。そう言う人もいるかもしれない。でも、そんな人には、生態系には、そして人間の精神的なあり方にも、すでに大きな影響が出ている。あなたがそれに気づいていないだけで、と言っておこう。もう一つ、マツ林にはマツ林を生息場所に行っている多くの生物がいることを忘れてはなるまい。マツ林の消滅はこれらの生物の消滅にもつながる。マツタケの例を出すまでもなく、他の様々な生物が人の気づかぬうちに消滅してしまう。保全しなくてはならないのは、そのような微生物も含めた多様性を持った自然環境なのであって、人間に都合の

良い、人間さえ守ればそれで良いと言った環境では無いはずだ。そんな身勝手な環境保護論では、結局自然にしつぺ返しを受けるだけだ。最近、このような自然観、つまり、「所詮マツなど」という考え方を持つ人が行政担当者の間にも増えているように感じる。それは、我々の周囲からアカマツもクロマツも姿を消し、マツ林に対する親しみが薄らいだことにも一因があるだろう。だから、悪循環なのだ。

マツ枯れは流行性の疾病であると同時に、国外からの侵入性の病害でもある。そして、侵入性の病害によく見られる、在来生物への破壊的な影響を発揮しているのが「マツ枯れ」だと言える。だから、我々は、身近にあって親しみもあったマツ林を侵入性の病害から守ってやらなくてはならなかったのだ。他の植物が生育し難い痩せ地に、成林できるという特性を持つマツ属樹種は、長い間日本人に、他の樹種では置き換えの効かない、多くの豊かさと潤いをもたらしてきた。そのことを忘れ、安易に樹種転換を提言する人達も、一度立ち止まって、マツ林が果たしてきた役割について、再考するべき時ではなかろうか。